

和歌の詩化

—〈言葉による見方・考え方〉の働かせ方—

竹村 信治

（広島大学）

平成二八年一月二二日、中教審「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（第一九七号）が公表され、次期学習指導要領等改訂の基本的な方向性が示された。それによれば、「社会に開かれた教育課程」の実現による「未来の創り手となるために必要な資質・能力」の育成が「生きる力」のそれを引き継ぐ目標となり、「学力の三要素」は「資質・能力の三つの柱」と捉え直され、それらの育成と評価（何が出来るようになるか）に向けた学習内容（何を学ぶか）、学習過程（どのように学ぶか）の改善、再構築が求められることとなった。

とりわけ、学習過程の質的改善にかかわるアクティブ・ラーニングは「資質・能力の三つの柱」の育成を担う指導法として重視され、その視点が「主体的・対話的で深い学び」の新標語をもって示された。各視点の具体は次のように説明されている（中教審答申、第7章2）。

- ①「主体的な学び」：学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ②「対話的な学び」：子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③「深い学び」：習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

これらの視点は「全ての教科等における学習活動に関わるもの」とされ、学習活動を「主体的、対話的で深い学び」の視点で改善し、単元や題材のまとまりの中で指導内容を関連付けつつ、質を高めていく工夫」が求められている。その際、「学びの『深まり』の鍵」とされるのが「各教科等

の特質に応じた「見方・考え方」である(同上)。国語科の場合には「言葉による見方・考え方」がそれで、その「イメージ」は次のように説かれている(中教審答申、別紙1)。

自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

「言葉による見方・考え方」の文言は平成二九年三月告示の『小学校学習指導要領』『中学校学習指導要領』でも「国語」の目標の本文の冒頭に掲げられている(第2章、第1節国語、第1目標)。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

また、中教審答申の別添資料2-1「国語科において育成を目指す資質・能力の整理」、同2-3「国語科における学習過程のイメージ」ではその具体が「資質・能力の三つの柱」に即して詳述され(中教審答申の別紙2-1「言語能力を構成する資質・能力」、別紙2-2「言語能力を構成する資質・能力が働く過程」もほぼ同じ)、さらに「大学入学共通テスト」(新テスト)の開発においてもこの「国語科において育成を目指す資質・能力の整理」との整合性が図られている(伯井美德「前大学入試センター理事」・大杉住子「大学入試センター審議役」著『新テス

トのすべてがわかる本』教育開発研究所、二〇一七)。こうして、この「言葉による見方・考え方」は、平成三〇年に告示される『高等学校学習指導要領』も含めて(中教審答申の別添資料2-2「国語科における教育のイメージ」参照、今後の「国語」学習指導の基軸をなすものである)。

さて、ここでは、こうした国語科学習指導をめぐる議論の動向をふまえて、「言葉による見方・考え方」の働かせ方の習熟にむけた教材発掘を試みる。「単元や題材のまとまり」として取り上げるのは和歌。「我が国の(伝統的な)言語文化」は新学習指導要領では「知識及び技能」としての扱いだ(第2、2内容、第3「指導計画の作成と内容の取扱い」項)には、

(3)第2の各学年の内容の〔知識及び技能〕に示す事項については、〔思考力、判断力、表現力等〕に示す事項の指導を通して指導することを基本とし、必要に応じて、特定の事項だけを取り上げて指導したり、それらをまとめて指導したりするなど、指導の効果を高めるよう工夫すること。

とある。また、前掲「主体的・対話的で深い学び」の三視点の内の②「対話的な学び」には、「先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める『対話的な学び』」とも見える。それらを念頭において、「対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付ける」「言葉による見方・考え方」を働かせ、「対話的」に「自分

の思いや考えを深める」和歌の学習過程を提案したい。

*

和歌の詩化——、和歌を詩の形にして詩として読もうというのがここでの提案だが、トートロジーとも見えるこんな提案をするのは、和歌が詩として読まれていないのではないかと疑念があるからである。

たとえば「百人一首」七〇番、人口に膾炙した良暹法師の、

さびしさに宿をたち出でてながむればいづこも同じ秋の夕暮

接続助詞「ば」のほかには特段の文法事項の確認の必要もない本詠の学習は、現代語訳、

あまりのさびしさに耐えかねて住まいから出てあたりを眺めてみると、どこもかしこも同じ、やはりさびしい秋の夕暮れの景色であるよ。

(鳥津忠夫／櫻原聰編著『カラー小倉百人一首』京都書房、一九九二)

の提示でおそらくは終わる。あるいは、

■主題 ものみなが秋の夕暮れの寂寥をたたえている感慨

■鑑賞 さびしさが身にしみて感じられる住まいを出てみても、心をなぐさめるものは何もなかった。ただいちめんの秋景色があるばかり。僧庵住まいの孤独のさびしさと、それをとりまく

自然全体の秋の深い寂寥とが、余情をたたえて歌われている。

いわゆる「三夕の歌」などのような、『新古今集』好みの、寂寥の美へとつながる情趣と言えよう。(同上)

といった解説が加えられる場合もあるが、いずれにしてもそこで行われているのは歌に詠まれていることについての説明、いわば和歌の散文化である。

和歌を詩として読むとは『古今集』序にいう「人の心」「心に思ふ事」、すなわち詠歌主体の心的体験を聴き取ること。表象(「言の葉」「見るもの、聞くもの」)に媒介されて、これに託して呼びかけられる表象以前の心的体験(「種」)を受け取って共感することだろう。しかし、それには仕掛けが必要だ。和歌を詩の形にする「和歌の詩化」はその一つの試みである(モデルは石川啄木「二握の砂」など)。手順は次の三ステップ。

*ステップ1 和歌に句読点を付す

*ステップ2 読点で改行

*ステップ3 句点で改行・一行空き

和歌に句読点を付すためには助詞、活用形、係り結び、連用中止法、連体止め、体言止めなどの文法知識が必要で、それはそれで文法学習の意義を確認させるのに有効だが、ここではその前段階として、現代語訳を利用する詩形化を例示しておく。前掲の現代語訳に付された句読点に準拠すれば一首は次のような詩となる。

さびしさに宿をたち出でてながむれば、
いづこも同じ、
秋の夕暮。

『カラー小倉百人一首』の「語句」解説には、

■同じ 形容詞の、終止形とも連体形ともとれる。終止形の場合、
四句切れの歌になるが、連体形で小休止し、下につづく形とし
て解しておく。

とある。終止形と解すれば、詩形は、

さびしさに宿をたち出でてながむれば、
いづこも同じ。
秋の夕暮。

となる。あるいは、現代語訳での句読点を、

あまりのさびしさに耐えかねて住まいから出て、あたりを眺め
てみるとどこもかしこも同じ。やはりさびしい秋の夕暮れの景
色であるよ。

と打ち直せば、

さびしさに宿をたち出でて、
ながむればいづこも同じ。
秋の夕暮。

の詩形もできる。また、三点リーダーを活用すると、

さびしさに、
宿をたち出でてながむれば……。
いづこも同じ……。
秋の夕暮。

も可能だろう。

詩の一行一行は表象（言の葉）としてそれぞれに抒情（心）を
醸成し、それらの交響を読むことが詩表現（心的体験）へと接近す
る回路となる。それは連（聯）についてもいえることだが、こうし
た句読点の打ち替えによるさまざまな詩形の創造は、それに応じた
心的体験を読む者に経験させ、相互比較はより深い心的体験の発見
へと読む者を導くだろう。

自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

ここで行われているのは「言葉による見方・考え方」を働かせての、良暹法師の心的体験「孤独のさびしさ」「秋の深い寂寥」への可塑的な接近（関係性を問い直して意味付けること）、それを通じて「孤独」「さびしさ」「秋」「寂寥」をめぐる「自分の思いや考えを深める」営みである。

*

「さびしさに」詠の詩形四種のいずれがより深い「心的体験」への接近となったか、その判断は控えるが、平成二九年二月一七日、広島県立尾道北高等学校において実施した「平成29年度三校（呉三津田・尾道北・福山誠之館）合同学習会」第3回国語」での高校一年生を対象とした授業では、最後の詩形に「時間」が感じられるとして、多くの生徒が共感を示した。

さて、「三校合同学習会」（二時間一コマ、同授業を二回。各クラス三〇名余り）では、前節の内容を「和歌の詩化」の事例として示し、次に生徒たち自身に詩化を試みさせた。取り上げたのは同じく「百人一首」から五六番「あらざらん」詠（和泉式部）。本詠が『和泉式部集』詞書に「心地悪しきころ、人に」とあることは予め説明した。

あらざらんこの世の外の思ひ出に今一度の逢ふこともがな

まずは各自で試案作成、次に隣同士で、さらに前後席四人で、最後は全六列の二列を一グループとして協議を重ね、その結果の三案をグループ代表に板書、解説させた。協議の中では、「あらざらん」の「ん（む）」を終止形とするか連体形とするか、意見が分かれていたが、結果は三案とも、

A

あらざらん……。

この世の外の思ひ出に……。

今一度の、

逢ふこともがな。

となった。「あらざらん」の主語について確認すると「自分の命」とそれぞれ即座に言明した。

それを承けて、協議中の提案にもあった別の詩形、

B

あらざらん。

この世の外の思ひ出に、

今一度の、

逢ふこともがな。

を取り上げ、さらにこちらで用意した「あらざらん」の「ん(む)」連体形案、

C

あらざらんこの世の外の……。

思ひ出に、

今一度の逢ふこともがな。

を示し、それぞれの場合の「あらざらん」の主語について考えさせた。

A: わたしの命

B: 「逢ふこと」

C: あなた

これにより、Aは「絶望感」、Bは「空しさ」、Cは「孤独感」を醸すものとして了解されたが、その後、末尾の「もがな」が「叶わぬことへの慨嘆とともにある願い」を表明する終助詞であることを解説し、本詠が「逢ふこと」の願望とそれが叶わぬ「絶望感」「空しさ」「孤独感」との間で宙吊りになっている詠歌主体の心的体験を詠じ、それへの共感を我々に呼びかける和歌となっていることを確認した。

*

ここでも、その学習過程で行われているのは「言葉による見方・考え方」を働かせての、心的体験への可塑的な接近（関係性を問い直して意味付けること）、それを通じて「自分の思いや考えを深める」営みである。

『文学』を『古今和歌集』の序に倣い、「事、業、繁き」「世中に在る人」つまりは「社会的存在」（新日本古典文学大系『古今和歌集』〈岩波書店、一九八九〉仮名序脚注）たる人が生活世界で経験する心的体験（仮名序:「心に思ふ事」、真名序「感」、すなわち「思慮」（真名序）もしくは「哀楽」（真名序）を言葉に翻訳・翻案し（真名序「詠は言に形はる」≡仮名序:「万の言の業とぞ成れりける」、真名序「其の華を詞林に発くものなり」、共感をもとめて呼びかけ問いかける行為、そしてその言語体のことと考えるとして、そうした呼びかけ問いかけに耳を傾けて心的体験を可塑的に再構成し、これを了解し、それに共感し、応答するのが『文学』という体験」だろう。「言葉による見方・考え方」において求められているのは、こうした対話を通じた学習者の『体験』の充実、そのための働かせ方の習熟^④、そして、その習熟に向けた学習過程の工夫であるように思う。

※なお、小稿「『文学』史の構想―正接関数としての―」（小峯和明監修・宮腰直人編『日本文学の展望を拓く④ 文学史の時空』笠間書院、二〇一七）参照。